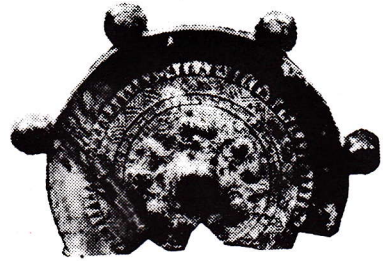


文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

百済観音の思い出

会長 森 藤 幸

本年三月十七・十八日、本会主催で奈良方面の文化財現地見学が実施されたので私も参加し、十七日法隆寺へ参詣した。法隆寺の百済観音には古い感動の思い出があるので、別にわくわくする程の期待はなかったが、それでも昔の感動の再確認をしたい希望はあった。しかし拝観時間が充分でなかったこと、拝観者がぎわしくて雰囲気が悪かったこと、保護上の関係で照明が暗かったことなど条件が悪くて、希望通りいかなかったことは心残りであった。

しかしこれは、条件が悪かった故でなく私が高齢化した故だろうと一抹の淋しさを感じた。法隆寺の百済観音に初めて出逢ったのは約半世紀前の昭和十六年四月十四日のことである。昭和十六年といえは時局は愈々厳しくな

る。しかし四月ごろはまだ余裕があったのか、当時西川村役場に奉職していた私は、村議会議員さん方の研修旅行のお世話をして、奈良方面へ行き法隆寺を訪れたのである。当時はまだ文化財などということはそんなにいわれない時代で、奈良へ行くといえは東大寺の大仏様、興福寺、春日神社などの参拝、若草山と鹿くらのもので、法隆寺も薬師寺も日程に入らないくらいであった。私達も泊った旅館の主人のすすめで参詣することにしたのであった。その日の日記に「旅館の主人のすすめで法隆寺へ行くこととする。奈良駅から三つ目の小駅で三十分位。それからデコボコの田舎道をバスで十

分た。……ああ聖徳太子の住まわれた所……日本文化発祥の地。仏教興隆の地。ああこれが聖徳太子の歩まれた回廊か、低回去るにしのびず、宝蔵に仏像のオンパレード、そこで春雷の驟雨に逢った。あわててどちらかの門の屋根下へ走り込んだ。付近の参観者も皆駆け込んだ。そのごった返す人混みの中の五、六人離れたところに美しい尼僧がいた。年は二十五、六歳ごろか色目は思い出せないが着物の上に紫の被布を着て、白足袋に雪駄ばき、供の尼僧が一人付いていた。その美しいこと気品のあること、ゆで玉子のむき立てのような真白な瓜ざね顔に絵に画いたような目鼻立ちで鶏群の一鶴というか掃き溜めの鶴というか天女もかくばかりという美しさだった。しばらくすると尼僧が二人傘と下駄を持って来て（当時は今のように自動車はなかった）傘を差しかけてどこかへ案内して行った。その間十分位だったろうかただ茫然自失して見とれているばかりであった。これは百済観音が私の感動に感応しましたして生身の尼僧に現成遊ばされたかと感動なお一人であった。百済観音を思うときこの尼僧が思い出され、この尼僧のことを思うと百済観音がダブルのである。

昭和二十四年一月二十六日、法隆寺金堂の壁画の模写中失火の事

件があって、文化財の保護ということがやかましくなり文化財が世に浮上して来た。本町でも昭和五十三年四月県文化財保護協会の支部が結成され、その事業の一つとして文化財現地見学が行われ、ほとんど毎年京都奈良方面へ研修旅行に行っており、特に奈良の博物館で行われる正倉院展覧会には会では勿論、個人でも最近まで欠かしたことがないくらい奈良へは行っているが、どうしたことかその後法隆寺へは足が向いていない。百済観音の二度目の拝観は、昭和四十七年七月九日である。奈良市で全国の市町村教育長会が開催され、それに出席のついでに法隆寺へ参詣したのである。その日の日記には「懐しい恋人に逢う気持」で行ったと書いてある。感動の様子を書いてないがただ「俗化が思った程ひどくないのが嬉しい」と記してある。

いづれにしても百済観音はきざな陳腐ない方だけれども、私にとっては永遠の恋人でありいつでも逢いたい恋人である。

歴史と文化の愛護者

青木卦二さんの逝去を悼む

野田直治

去る三月二十九日、思いもかけず青木卦二さんの急逝を聞き、私は夢ではないかと、自分の耳を疑いながら、自宅へ駆けつけた。しかし残念ながら、それは夢ではなかった。無常迅速とはいいいながら、私はぼう然として、今は物言わぬ青木さんの前に合掌をささげる外なすすべもなかった。青木さんの父上は口大間見の出身であった関係から、私は若いころから卦二さんとは知り合っていたが、親しくお付き合いするようになったのは大和町史(村史)の編集が始まったからである。青木さんは歴史が好きで、積極的な人であったから観音堂や弥富公会堂の調査については進んで協力してくださった。以下、その面影を追いつながら、青木さんの生前をしのんでみたい。

観音堂とその山 剣と口大間見の境にあるこの「観音堂」は古跡

であるが、あまりにも古いので、いつの代に栄え、滅んだのか盛衰の程も明らかでないが、礎石の規模から見て、かなり大きな堂宇があったと推定される。しかし、これは北方の長滝寺末で天台文化に属していたものかそれとも阿千葉城の東氏文化に属するものであったか、にわかに断定することはできない。青木さんもこの大きな課題にとり組んで情熱をもちた一人であったが、志半ばで世を去ってしまったわけである。しかし、青木さんがこの山で発見した骨つぼ(四耳壺)は室町時代の作といわれ、観音堂の歴史研究の重要史料として価値が高い。町の重要文化財に指定されている。

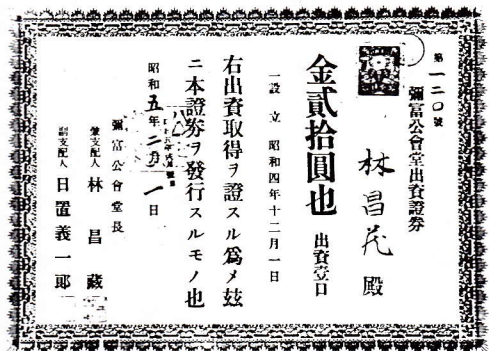
弥富公会堂の設立 町史(下巻四三二ページ)に述べたように、当町には三つの劇場があった。大正初年に徳永にできた大正座、昭

和初年に剣にできた弥富公会堂、及び昭和二五年徳永の大正座跡に建てられた山田公会堂がそれであるが、青木さんの関係したのは、弥富公会堂である。

しかし、この公会堂については設立者といわれる人々が、すでにみな故人となっており、また史料もほとんど散失していたので、その歴史を書くにも何から手をつけたらよいか分からない状態であった。それで、やむを得ず古老の記憶に頼るより外ないと思つて、小池久江さんにお願ひして、数名のかたがたに集まっていた。二年九月五日。所は久江さん宅、参集されたのは、小池政太郎(八七才)同柳一(八三才)河合順治(八四才)加藤

の四氏であった。これほどの高齢者が揃つて元気で一堂に集まり、五〇年前の文化を語る光景はまことに壯観といつても過言ではなかった。ただ残念だったのは、青木卦二さんが仕事の都合で参加されなかったことである。

この日の話題は、主として公会堂設立についてであった。まともてみると、公会堂は河合柳之助(地主)・河合寛三(彦河屋)・水見象之助(時計、写真屋、古川町出身)加藤梅次郎(梅月)蒲信次郎(製材)加藤由松(旅館)荻田春吉(荻田屋)林藤太郎(仏壇商



弥富公会堂出資証券

◎日置義一郎（農業）及び林昌蔵（鶴米医院）らが発起人となって、昭和の初めごろ設立に着手した。ここまでは、大体の意見が一致したが、それ以上一步を進めて、何年何月かということになると、何しろ五〇年も以前のことだから、よほど確かな史料がない限り、決定的なことは言えない。この日参集した人たちは、みなアタマのしつかりした古老ばかりだったけれども、これ以上話を進めることはできなかった。

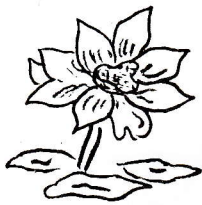
新史料の発見 古老会談で話しが行き詰まったことを知った青木さんは、林昌蔵医師の未亡人（八四歳）宅を訪ねた。事情を話して了解を得、医師の遺品を調べた。すると思いがけない貴重な史料が発見された。それは弥富公会堂の設立当時に発行された数枚の株券であった。これさえあれば、公会堂の設立年月日も、設立者も、出資金もすべてがはっきり分かる。まさに第一級史料である。私たちが長年求めてきた史料は、こういう史料である。青木さんは、所蔵者の了解を得て、これを町史編集室へ持参してくださいました。私は青木さんの尽力に深く敬意を表しな

ら、

「林医院長を公会堂長兼支配人に、日置義一郎を副支配人に推薦して、昭和四年一月二日弥富公会堂を設立した。出資金は一口金二〇〇円であった。」と、自信をもって町史に書き入れた。ちなみに、この株券は所蔵者から町当局へ文化財資料として寄付された。

なお、公会堂は、青木封二さんの日記によれば、昭和四年一〇月に着工し翌五年一月、土壁未完成のまま正月一日から三日間盛大に舞台開きをしたという。このとき歌舞伎役者市川福升一座が来演した。また一説によれば、名古屋出身の歌舞伎役者嵐森太郎がきて「太閤記」の「桔梗の旗上げ」を上演したともいわれる。終わりに青木さんのご冥福を祈りつつ、この稿を終わる。

◎印は当時の村会議員



万場南宮神社境内で

発見された呪術具的石器

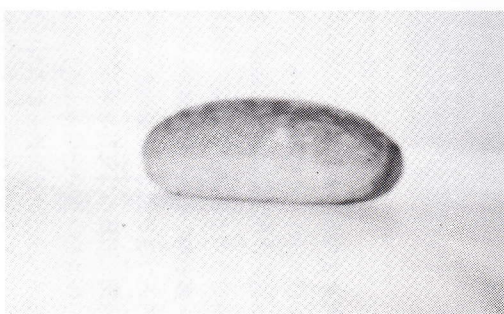
畑 中 淨 園

昭和六三年七月下旬、下方場の南宮神社で氏子による清掃作業が行われた。そのとき、氏子の一人白田藤松さんが、町指定の天然記念物であるタカオモミジから西へ約六mの石垣上にあつたモミジの切り株（枯れ木）になっていたのを前年に切り倒したもので、株の直径約六〇cmの空洞に何気なく手を入れて、中の腐食土を取り出したところ、だ円形の石がでてきた。（写真参照）水で土を洗い落とすと、はっきりと人工による刻線があらわれた。石質はやわらかで、淡黄の色をしている。

石の長さは八・五cm、幅三・五cm、胴周り一〇cmやや偏平のだ円形である。石の両端には円形の線が彫りまわしてあり、片方は特に深く約一mm余である。これは明らかに男根の形で、その円形の刻線は割礼の痕跡かとも思われる。石の両面のうち片面には魚と思われ、文様が刻まれ、他の面には鹿らしい動物が彫ってある（図参照）。これは、魚類や動物の捕獲を祈念した呪術具であつたと思われる。性器の信仰は、自然の生産力に対する信仰で、ギリシャやローマでも男根を祭りに用いており、中国では秦・漢ごろから陽根を表した器物が出土しているという。（角川日本史辞典）。わが国でもこうした信仰は古くから各地で行われていたことは周知の通りである。南宮神社から約二〇〇m西方にある字藤国（ふじくに）の桑田家には、磨製石斧・石棒・石鏃など十数点の中に石冠一個が採集されている。この石冠は石質がやわらかで、うす黄色をしていて、南宮神社境内で発見された当石器と同質のものであることに注目したい。なお、桑田家には、昭和初期に旧国鉄越美南

線の鉄道敷設工事のとき、当家の裏の宮屋敷と呼ばれる地点から発掘された男根形の石（長さ約三〇cm、径約一五cm）が感ぜられている。

縄文後、晩期（紀元前一二〇〇年ころ～前三〇〇年ころ）に、中部山岳地帯に多く出土している石冠・石棒・御物石器・独鈷石などは呪術具的の石器と考えられている。縄文後・晩期は、気候が寒冷化して、生活環境がきわめてきびしい時期で、狩猟採集も思うにまかせない時期であつたと考えられる。こうした時期を生きぬいていくた



めには、自分たちを守ってくれる不思議な力を求め、獲物の捕獲を祈念せずにはおれなかった。

したがって、こうした呪物崇拜は現代人の考えるような荒唐無稽なものではなく、当時の人たちの素朴で純粋な、いのちがけの信仰であったと考えられる。

奈良大和路文化財見学

有 代 信 吾

平成元年三月一七日、曇り空ではあったが、まずまずの天気には恵まれて、一行二七名は白山観光の貸し切りバスで午前七時、大和町を出発した。車内で今日の見学箇所、法隆寺のあらましに加えて仏教の伝来、飛鳥、奈良、平安時代

の仏教と仏像等について河合俊次先生の講話を拝聴した後、アルコールも入って車内は賑やかになり、斑鳩の里にある世界最古の木造建築といわれる法隆寺に着く。門前の太子堂食堂で昼食をとって山門をくぐる。法隆寺は生駒郡斑

鳩町にあって奈良市内から少し離れているためか参拝した人は意外に少いようである。南大門・中門回廊・金堂・夢殿・五重塔をはじめ多くの建造物や、仏像では薬師如来・木造四天王立像四体、吉祥天立像、銅造釈迦如来像など数多くの国宝があり、重要文化財に至っては、数えきれないほどで、約二時間、ここでも河合先生の懇切な説明を聞きながら拝観した。会員の方から「文化財保護協会の旅行は親切な詳しい説明がしていただけなのでありがたい」との感想をいただいた。

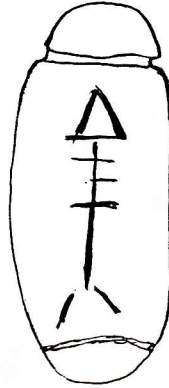
創建以来一三〇〇年この斑鳩の里、矢田丘陵の山裾に鎮もる大伽藍、その歴史の重みがずしりと、のしかかってくるようである。法隆寺を出て東隣りの中宮寺を拝観、この寺は聖徳太子のお母さんの御願によって建てられたという尼門跡寺である。国宝の本尊弥勒菩薩半跏像は飛鳥時代のものでそのお顔の優しいほほえみは実にすばらしい。

午後四時ころ奈良市内に入り、今晚の宿共済会館やまもとに落ち着き、夕食までの時間はそれぞれ市内観光に出かける。



法 隆 寺 に て

(A)



図

(B)



夕食は豪華な大広間で大宴会となった。新入会員の方もあって、自己紹介の後、話のはずむ者、カラオケで自慢ののどを披露する者、楽しい一夜であった。

翌日は、八時半ホテルを出発、当麻寺に向かう。車中で河合先生から「綴織当麻曼荼羅」の説明や、この曼荼羅を蓮の糸で織り上げたという中将姫の伝説などのお話を聞く。仁王門を入ると左手に鐘楼がある。この鐘は京都妙心寺の梵鐘と共に日本最古のもので、天平時代(約一三〇〇年前)の作とのこと。法隆寺に次いで国宝、重文の多くある寺で、説明の坊さんについて拝観する。本堂の曼荼羅・講堂の本尊阿弥陀如来や多くの仏様、金堂の弥勒菩薩などにお参りする。また庭園はみごとで折から早咲きのしだれ桜や桃の花が今を盛りと咲き誇っていた。

車は山を越えて大阪府の太子町へ向かう。この叡福寺に参詣、この寺は聖徳太子の御廟所として有名である。境内正面の奥に聖徳太子廟がある。太子の生母と夫と三人が葬ってあり「三骨一廟」の円墳の墓所である。

またこの叡福寺は真宗門徒にあっては磯長の御廟といひ親鸞聖人所縁の寺として知られている。畑中浄園先生の説明「聖人は一九歳のときの九月一三日から一五日まで三日間、この御廟に参籠され夢のお告げを受けられた。それは聖人のお命は後一〇年とのことで、さらに真剣に修行に励まれたといわれている」と。同じ境内に親鸞参籠を記念して明治後期に建てられた見真堂がある。

参拝を終って藤井寺市に向かう道は普通車でも行き違いの困難なような狭い道である。これが国道と聞いて驚く。ようやくにして藤井寺市に入り葛井寺の門前で昼食後葛井寺に参詣、この寺の本尊千手観音は坐像で、天平時代の作といわれ、像高一・四六mである。頭上に十一面を戴き、背後に大小一〇四〇本の手を放射状に並べている。千手観音といっても実際に

手が一〇〇〇本以上ある観音さまはこだけというのである。

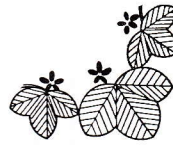
お参りをすましてバスに戻るとちょうど所定時刻の午後二時、予定の道明寺は車中から拝んで割愛して帰路につく。

今回の文化財見学旅行は、主として聖徳太子ゆかりの寺の古い仏像を拝観することをねらいとして計画したのであったが、河合俊次

先生には最初の計画から、道案内を加えて研修の講師までお願いしてお骨折りを下された御苦労に改めて深く感謝を捧げる次第である。

またご参加下さった会員の皆さんのご協力によって、意義深く、楽しい研修旅行のできたことに対して厚くお礼申し上げて研修旅行の概略の報告とする。

当麻寺へ



小池久江

すっかり冬返った寒さも、バスの中は明るかった。当麻寺へ向かう田舎路を走る車窓から、あれが二上山、塔が見える、と先生の指先に目を追いながら、静かな家並の続く道に入り左右を気にしながらこの道をバスを走らせるのが悪い様な気さえする。

二上山といえは若くして死刑に処せられた大津皇子の悲劇、辞世の歌を思う。

百伝う磐余の池に鳴く鴨を

今日のみ見てや雲隠りなむ

大津皇子は二上山雄岳の頂上に葬られたという。

伊勢の斎宮であった姉大伯皇女は弟の死を嘆き詠まれた歌は皇子の歌と共に心が傷む。

うつそみの人なる吾や明日よりは二上山の弟背とわが見む

磯の上を生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありといはな

今馬酔木の花ざかりであった。

当麻寺はこの二上山の東麓に位置する。用明天皇の皇子麻呂子親王が河内(大阪)に建てた寺と、天武天皇のころ現在地に移したといわれ、創立に関する寺伝の真偽は明らかではないが、当麻氏の氏寺であったと説明を聞く。

仁王門を入ると目前に少し傾いた感じの鐘樓があって、この梵鐘の見方に就いては年代が古い程撞の位置が高いのだと教えて頂く。境内閑静なたたずまい。紅色の桃の花がこぼれそうに開き、咲き初めた桜に――見渡せば柳桜をこきまぜて――の歌がびつたりの季。

平安時代の終わりに火災があったが、本堂、金堂、講堂を始め多くの国宝・重要文化財があり、東塔・西塔(三重・国宝)をもつ唯一の寺だといわれる。当麻曼茶羅は蓮糸を染めて織り上げたという中将姫の伝説。ほの暗い室内に少し笑みをもちユニークな髭面の四天王もあまり出逢わないが親しみのある天部であった。

納骨の案内などあって、こんな静かな所に納めてもらえたらいいなあ、又こんな便利の悪い処では預けっぱなしかも……なんて

元談も飛ぶ。ここは真言宗と浄土宗に属し、両宗が毎年交替で輪番するようになっていたか。

牡丹の名所といわれるだけあって庭には沢山の牡丹が植えられて、今赤い芽が十cm程も伸び、春風に揺れている。三重塔、池に鯉、枝垂れ桜が見頃で、すべて絵になる景観を賛美し、欲をいえばこの庭を眺めながら熱い茶を一杯所望したい処、少し外気が冷えてきたせいもある。

お茶席を横目に通る過ぎながらゆっくり一日この庭を歩いてみたいと誰もがそう思われたことだろう。

大型バスの乗り入れが出来ない程狭い道路の関係か今日も当麻寺は訪れる人も少なくいい気分で見学することが出来ました。曲りくねった道にいく度か塔が見えかくれしながら遠ざかり次の見学地へとバスは走っていく。

水煙が我に倒れる如くにて雲走りの斑鳩の里。うづくまる鳩の胸毛を分ける程春日野に吹く風の冷き



文化財めぐり

木 島 泉

今回の文化財めぐりは、協会は
じまって以来の出席があつて、小
型バスも満員となる盛況でした。

京都や奈良は、いつ行つても、何
度同じ所をめぐつても飽かず、心
をみたくてくれます。

はじめの日は、ひどく寒くて、
ふるえあがりしましたが、法隆寺で
は、私の大好きな九面観音様に再
会しました。この観音様の隣りに
は、有名な夢違観音が置かれて、
人目をひいていますが、私は法隆
寺というと九面観音ただひとすじ
なのです。この九面観音は、白檀
の一本で彫られていて、実に精緻
な細工がなされています。そして
何よりもそのお顔の美しさ。ほの
かな微笑をうかべた、ふくよかな
頬、花びらのような唇、まったく
心ひかれて立ちつくしてしまいま
す。どのような人がこの仏像を彫
られたのでしょうか。

夢違観音は、悪夢もよい夢にか
えてくださるといふ。人間の弱さ
を救つてくださる観音様。
今回は、夢殿の秘仏は拝観でき
なかつたけれど、大好きな九面観
音に出逢つて私は満足。

おとなりの中宮寺は、端正なみ
ろく菩薩がおいでになります。少
女のようだとたとえられるが、す
つきりとした美しい菩薩です。
宿へは早く入り、荷物を置くの
もそこそこに、三月堂へいきまし
た。不空羂索観音の両わきに梵天、
帝釈とも、日光、月光ともいわれ
る静かな表情の塑像があります。
これはまた、実に静けさのみちた
表情でした。

夕日が、観音の右半身をあかる
く照らしています。四天王にふま
れている邪鬼も、のどかな春の夕
光の中で、なんとなくのんびりム
ード。永遠にふんずけられている

のだけれど、およそ憎めない顔付
きです。

次の日も上天気でした。あこが
れの当麻寺。

奈良時代建造の東塔、西塔があ
り曼陀羅があります。この曼陀羅
は中将姫が蓮の糸で織つたものを
鎌倉時代に模本されたので、約四
米四方もあるという大きなものが
金あみがへだてており、うす暗く
てよく見えません。

中将姫は藤原豊成の娘。継母に
苦勞し出家したといひます。近年
造られたと思われる像が庭に建つ
ていたが、実に愛くるしい少女の
面影でした。

この寺は牡丹が有名です。まだ
芽がのび出たばかりで、それもた
くさん植えられています。盛りに
はきつと美しいことでしょう。塔
は三重塔で、糸桜が咲きかけてお
り、春の日ざしにみちています。
あちこちにお茶室などが建てられ
ており、ここここに、美しい庭園
がありました。

山野草が植えられた庭園は、三
極の花が盛りで、黄の花の株と赤
花の株と、この二株に目をうばわ
れました。貝母の花、すみれ、雪
割草、その他いろいろ。

時間がもっと欲しいな、と思ひ
ました。ここでは茶粥も食べられ
るとのこと。こんど来たなら食べよ
うと。

お天気に恵まれ、少し寒かつた
けど、たのしい旅でした。



随 想

村 井 正 蔵

まず、衣食住については戦中戦
後を通じて夢にも考えられなかつ
たことが現実となつてまいりまし
た。特に生物にとって欠くことの
できない食生活は、殊のほか改善
されていると思います。まことに
勿体ないくらいで、この上もない
幸せを痛感するところです。

また、カラーテレビの画面から
も、現実の生活上も美人の多いこ
とです。きれいな衣服をまとい、
美しく化粧した美人に、至る所
出あい、言葉を交すなど、世の男
性にとつてはたいへんな感動を覚
えることも多いのではないでしょ
うか。あたかも絵で見る天上界の
天女の群れの中に生きている心地
がいたします。いかがでしょうか。

最近の世相は何とも騒々しいこ
の頃であります。国際文化、経済
の交流貿易摩擦等、国内にはリク
ルートをはじめ贈収賄、数々の不
正事件など枚挙に暇がないのが現
実ではないでしょうか。年老いた
私などが、このような事象にいち
いちこたわつていても仕方ないし
気分も滅入つてしまいます。もの
は見よう考えようで、残された人
生を如何に生きるかということが
大切だと思ひます。

その点で、本会の事業目的
である町内の文化財の話や確認、
発掘保護を計り、郡内県内の重要
文化財の見学や、遠く京都奈良の
旅行などでの重要文化財や、美し
いみ仏に参拝できることは、まこ
とに楽しいことと私は考えており
ます。

また、それと同時に会員の皆様
方とのコミニケーションをもつチ
ャンスでもあります。思ひのまま
に書いて見ました。

東氏館跡庭園

に立ちて



土 松 新 逸

東氏館跡が、昭和五四年六月に発見されて、翌五五年から五八年にわたり発掘調査が進められました。その結果、中国製陶器をはじめ数々の出土品があり、東氏の文化を知る貴重な資料となりました。池を中心とした庭園遺構は、その風情など京都の名園に匹敵するものがあり、国の名勝に指定されるようになったことはもうすでにご承知の通りであります。中世武将の館跡庭園で国の名勝となつたのは、福井県の朝倉氏館跡庭園、三重県の北畠氏館跡庭園に次ぐものであり、こんな貴重な名園が私たちの郷土に遺っていたことは何だか不思議な感さを感じます。

その後、この地域のうち一九一七㎡は町が買収して公開保存されることとなり、他の地区は水田として埋め戻されました。昭和六二年三月土地改良による換地処分が完了し、同年六月一日付で東氏館跡庭園六七五七㎡が国の名勝として正式に指定されました。そして、同年から公開保存分一九一七㎡内の庭石強化補修工事が行われ、昭和六三年九月から一月にわたり、未発掘の西南部分と東南部分が発掘調査されました。この調査では、出土遺物も少なく、遺構も東氏館初期のものと思われ、溝が検出されましたが、期待していた池への導水溝のはっきりしたものは検出されませんでした。

今回農道部分の付替えて、農道にかけられていた屋敷跡の石列がはっきりと姿を現し、池の前の風情がよくなりましたのと、今後池の部分および丘の部分の整備で、いよいよ名勝としての真価が発揮されることと思えます。

町においては、「古今伝授のふりさ」と「づくりにまい進しておられますが、その一環として東氏館跡庭園を中心とした歴史の里公園づくりに力をいたされ、近くこへの歩道橋も完成されるようであり、やがてこの地域が私たちの町の一大幽えんの地としての姿を見せてくれることを期待するものがあります。

昭和五四年六月、この地にほ場整備工事がはじまったとき、ふと現地を訪れて、そこに出土している数多くの陶器片に出会ったのが奇縁で、この発掘調査に最初から最後までお手伝いした私には、数多くの思い出があり、いま、この東氏館跡庭園の一端に立ち、うたた感無量であります。

一五六号線に桜が咲くころ、いつも向小駄良の佐藤さんを思い出します。みんなが、そんな余裕さえない戦後、早くから桜を沿線に植え始められた。せめて国鉄バスが通る一五六号線なりとも、桜の

らとうなずけます。

した。

遠き日に遠きくによりここに来て遠祖たちの住みたまたいたる中世に日本の文学まもりたる東常縁いま在すがに

並びたる庭石に真昼日のさして向き向きにひかる生ある如く石の並び撮らんと向けばそれぞれにも言う如しわれを囲み

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

四月六、七日、京都の桜見物

有志と共にしましたが、ただ感謝し感動するばかりでした。やはり京都は、桜だけでも日本一の文化の街であることを確認しました。大和町も、町に一杯の花を植えて、他所からも押し奇せるような香り高い文化の町を築こうではありませんか。

大和町に花一杯

—香り高い文化を築こう—

高 橋 吉 一



一五六号線に桜が咲くころ、いつも向小駄良の佐藤さんを思い出します。みんなが、そんな余裕さえない戦後、早くから桜を沿線に植え始められた。せめて国鉄バスが通る一五六号線なりとも、桜の



ハザコのことづけ



日 置 繁



オオサンショウウオ（大山椒魚）は俗にハザコとも呼び、図体の大きいくせに至って目は小さくどこにあるかまことに目立たない。

グロテスクな風貌と温和な性質赤ん坊の手のような四肢などから愛される動物である。但しいじめられれば体から粘液を出して悪臭を放ち、一枚歯の大口を開けて抵抗をするが滅多には怒らない。動作はまことに緩慢で、夜行性であるが、時には昼間川底を這っているのを見かける。保護色で流木のように目立たず前世紀の遺物然たる動物である。

さてオオサンショウウオは鯨が魚の仲間でないのと同じく、魚ではない。先年小間見川のわが見たいと冗談を言って同地を訪れた人があったが、勿論鰐の仲間ではなく、蛙、蟻、いもり等と同じ両棲類に分類されている。両棲類の

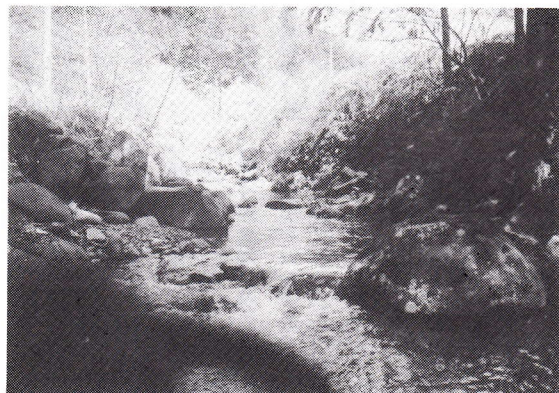
殖しその種を保存して行くものである。人間の環境問題とかわるところはない。殊にオオサンショウオの場合、緩慢な動作で、大きな体を維持する困難性は、地球上から恐龍やマンモスが消え去ったように、絶滅への道を辿っているように思えるのである。

指定以来当町においても、その保護の施策として、直接川水の流入する養殖池を作って飼育し、学者生徒の研究の便をも図った事もあったが、保護、繁殖の面では充分の成果は上らなかつた。また保護と観察とは必ずしも一致しないのである。人工の池の中に天然から隔絶して飼育することは彼らの自活の自由を奪いあまりよい成果は期待できない。私はオオサンショウオの身になって考えて見たいのである。今や町おこし運動の推進にこれを観光資源として見世物扱いをするような短絡は慎しみたい。まずどうして彼らが最後までここに生き残れたのであろうか色々な環境条件が挙げられるであろうが、

①昔ながらの清流と適当な樹蔭。
②河中の豊富な大転石や洗掘せられた河岸の洞穴が随所に点在し彼

らの絶好のスマミカとなった。

③大きな体を養うに足る食物が豊富であつて極めて雑食性に富む。こうしたことに加え地域ではこれを絶体に捕食しないうえ子供でも蛇を憎むような悪戯はしない、いわゆる保護の徹底である。而しながらわれわれ人間は彼らにとつて万全の協力者ではなかつた。無意識に②の彼らのスマミカを近年次第に脅かしているのである。それは河川工事や架橋工事である。河川における堰堤と護岸、架橋地点の上下流十米の護岸、これは堅牢なブロック積みや擁壁で爪かからない、工事は地域の発展や住



オオサンショウウオの生息する自然のままの小間見川



架橋や河川工事で整備せられオオサンショウウオの生息する小間見川

民生活或いは災害復旧乃至予防のため緊急を要するものであり、地域の要望の極めて高いものばかりであるから、今後益々推進されるであろう。えてしてこうした災害による洗掘又は欠壊か所の水中は彼らの絶好のスミカで工事現場でスミカを追われる多くの彼らを目撃している。工事施工という大義

も径または一辺が五、六〇cm以上長さ（奥行）二m以上、丸または角型コンクリート管を河床とほぼ同じ高さに伏設して常時水の代謝することが好ましい。この場合、最奥部を塞がないで彼らの産卵場所のつくられるような配慮がほしいものである。

名分のために、はからずも天然記念物保護にわれわれは逆行しているのである。人間の暖かい思いやりの心があるならば、新らしくできる工作物には必ずこれが保護施設の配置を義務づけることの必要を痛感するものである。そのためには関係機関がまずもって天然記念物保護の趣旨を尊重し、積極的に協力することがなければならぬ。次には予算と施設の構造であるがオオサンショウウオの生態をよく調べてこれに適切なものでなければならぬが工事そのものの効用・維持を阻害しないものでなければならぬ。

オオサンショウウオは泥のある奥深い水中で産卵し、また身をかくすことのできるところが安住のスミカとなる。人工のスミカは彼らの体長などから推して少なくと

も現在オオサンショウウオは幸いにして絶滅に類してはいないようである。前述の施策が施されれば決して遅くはないであろう。こう運動の一つとしてオオサンショウウオが研究者や視察者に、ひいては観光客にも、古今伝授の里の一連のコースとして世に紹介される日を夢みている。他面一六六年の歴史をもつ東弥分校は、平成元年三月三十一日を限りとして閉校し、その跡地ないし建物はとりあえず

これらのオオサンショウウオの資料館としても役立ちそうである。清流と太古の使者オオサンショウウオの里を見直そうではありませんか。

置き去りにされた大石



加藤 一 男

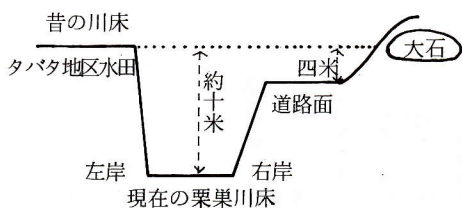
大石のあった付近には、砂利や川石はなかった。どうしてこんな大石がこんな高い所にあるのかと不思議に思ったが、ふと対岸をみると「たばた」地区の水田とはぼ水平の位置にあり、昔はこの位置が栗巣川の川床であったと思われる。昭和五年、たばた地区は場整備のとき多くの川石が掘り出された。幾たびかの

大洪水によって、他の石は流されたが、この石はあまりに大きすぎて置き去りにされたのである。自然は偉大である。邪魔にならぬものなら残してほしいほどの立派な大石であった。その後、石質がよくなったのか厚さ二〇cm程の板状に割られたものが積んであった。



置き去りにされた大石

付近地形断面図



文芸欄

俳句



花衣 鷺見 鈴子

母の掌のぬくもり届く花衣

雪割草のぞきし紅に甘えけり

畦青む姑の頼みの乳母車

つくし摘み千曲の土手に別れけり

電話待つ日数いくつや梅散りぬ

松の雪 日置 繁

双幹の幾世を共に松の雪

廃校に残る桜の三分咲き

虹消えて石垣古き鞍馬苔

袋ごともぎきて供う初葡萄

穂田ひつじだの穂のはかなきに日の淡し

秋祭り 横枕千代子

花並木つづく団子の匂いかな

こでまりの小粒の雫光りけり

供花にと鉄ためらう牡丹かな

獅子舞の足食む仕草秋祭り

木犀の香につつまれて喪の女

短歌



奈良路研修

清水 文枝

異国めくみ面親しき守護神の
おひげに春の塵白く置く

窓透す西陽に明る三月堂

剥落の秘仏仰ぎ見て佇つ

お水取りのお役終えたる松明の
焦げたる七基塀に立てかく

夢殿を出で来て歩く目前にて

疾風によるむ松かさ鳩

曼茶羅のお厨子を照らすろうそくに
病氣平癒中島とあり

高速路御在所あたりか視界みな

彼岸嵐の吹雪がはばむ

つづれ織りに浄土世界を描きある

文亀曼茶羅網越しに見る

春愁 木島 泉

春愁やあそび心の邪鬼の指

塔仰ぐ紅のうすれて牡丹の芽

花ミモザ揺れて風呼ぶ雲の色

春雷 田中まさを

春雷や旅を明日の真夜に鳴る

春疾風奈良の仁王に見据えられ

花冷や菩薩の唇に朱がのこり

春夕焼曼陀羅拝む網越しに

若わかしき守護神の髭花の雨

京の花便り 高橋 吉一

老師を乗せて

車椅子老師涙す花の山

高倉天皇愛姫 隠棲の「小督庵」
小督の琴花響きけん嵐山

両岸満開

賀茂川に紅流す紅垂くれない べにしれ

西田幾多郎に因む「哲学の路」

哲学や果てなき夢の花の路

平野神宮

夜桜の宴うたげとどろく大やしろ

丸山公園

夜桜のかかりに恋の乱舞する

ああさらばさらば祇園の花吹雪

春宵 田中 裕

なんとなく地球儀見つめ春の宵

補植すと一人百姓合羽着る

雄一匹残り鈴虫鳴きにけり

納骨をすまして京の秋深し

腕数珠をして人妻と雪静か

能篋 黒岩きくゑ

祀られし河童拗ねをり花の宴

恋蛩輪廻の闇を浮き沈み

能篋消えてひたひた夜の秋

露けしや番屋の跡の掟札

陣場野の高札秋蝶ひくく舞う

春の朝 小池八重子

訪ないし家は梅咲く空家かな

藤房に手の届くまで抱きあげし

手術後のお茶の旨しや春の朝

余生なお大根時きて暮れにけり

年の瀬やまだ縁切れぬ医者の門

桑の実 有代 信吾

本堂の後ろ余寒の天邪鬼

筆の馴れ昭和と書きて春寒し

蚕飼う家絶え桑の実の熟るる

蛸や父と植えたる山に佇つ

階の木の実に残る日の温み

昭和六三年度 會員名簿

(順序不同)

(順序不動)

(氏名) (役名) (電話番号)

一 剣一
山下 運平(顧問) 二四〇六
旗 勝美(顧問) 二〇三一
村瀬 喜八 二二二八
山下 真一 三四九五
河合 俊次(理事) 二二四六
畑中 康蔵 三五〇七
畑中 定夫(理事) 二二六八
小池 久江(理事) 二五七六
国枝 貞雄 二二九三
池田 憲三 二二八二
山下ふみえ 三三二七
加藤 正恵 二二〇七
高橋 明 二四八八
日置 照郎 二〇七二
加藤 文蔵 二八〇二
佐藤 光一 三三〇一
田中 裕(理事) 二二〇〇
高橋 義一(理事) 三三九二
青木 卦二 二二九二
河合 恒 二二五八
河合 芳英 二二〇四
奥村千代子 二〇二二
加藤 勝二 三三八七
河合つや子 二〇三八
一 大間見一
野田 直治(顧問) 二二八五

野田 茂(理事) 二二八五
青木 新三 二四三六
村井 正蔵(監事) 二二二三
日置 繁(理事) 二二五四
大野 紀子 二二三〇
日置 幸雄 二二七〇
野田 英志 二二八五
小野江選量(理事) 二二七六
清水 一作 三〇八六
山下 直美 三三三八
藤沢五三郎 三一〇六
池田 充彦 三〇九〇
小野江 勉 二二七五
池田 栄枝 二二八五
池田 恒純 二二七九
日置智恵子(理事) 三〇五二
松井 直(理事) 四〇八五
坪井 政夫 四〇八五
松井 賢雄 三九九一
古田 忠 四〇九〇
井口 一雄 四〇二〇
佐藤 秀夫 四〇〇一
藤代 順行 三〇六〇
一 小間見一
田代 俊雄(理事) 三九六五
田中 吾一 二五四七
島崎 英二 三〇三七
平沢 勤 三九三七
一 万場一
畑中 浄園(副会長) 二四四一
畑中 真澄 二四四一
石神 堯生 二四一三
稲葉 春吉 二五〇三
黒岩きくゑ 二四六〇
三島 秋男(理事) 二四六一

桑田 和子 二四一九
桑田 渥見 二四四六
桑田 信夫 二四一八
黒岩 弘巳 二四五八
井上 昌保(理事) 二五二一
井俣 初枝 二七五八
筧 明代 二五三二
一 徳永一
木島 泉(副会長) 二〇三三
木島 観一 二〇二三
鷺見 鈴子 二〇〇五
鷺見 おと 二一八九
直井すゝ江 三五九二
矢野厚幸子(理事) 二〇七七
鷺見 ゆき 二二八九
田中まさを(理事) 二〇六七
山内喜久子 二六一六
木島 洋女 二五九一
土松 新逸(理事) 二七三一
遠藤 賢逸 二二二一
渡辺 明夫 二六九五
木島 三郎 三五九〇
矢野原吉夫 二一三九
一 河辺一
清水 幸江(理事) 二〇一九
尾藤 元子 二一四七
横枕千代子(理事) 二三八九
前田 孝 二二〇一
前田 鈴 三六六六
白田とも子 二二五〇
小池八重子 二〇四八
一 神路一
森 忠敬(顧問) 二〇八三
白田 尊徳(理事) 三七三〇
山田 真人 二二一四

羽生 清 二二七一
一 牧一
滝日 準一(理事) 二七〇五
栗飯原高照 二二六二
土松 康二 二七二九
日置 貞一 二六六一
土松 貞二 三九八〇
日置 昇 三六三六
遠藤 米吉 三六三七
遠藤 光平 三九八一
遠藤 周一 二八九〇
滝日 義一(理事) 三〇六二
滝日 治 三四〇六
田口 勇治 三九五〇
齐藤 太門(理事) 三九二二
日置 一朗 三六七四
松森 益吉 三九二二
加藤 一男(理事) 二八七〇
清水 定 二七一〇
日置 元衛 三四一七
粥川 溜 三三八七
本田 欽一 三一六〇
金子 徹 三四二六
一 栗巢一
島崎 増造(監事) 二二三六
増田 洋子 四〇四一
寛 政之助(理事) 四〇三一
中山周左門 二二七八
武田 信康 二二八四
鷺見 豊夫 二七八八
野田 光誠 四〇二七
一 古道一
松井 弘雄 二七九五
細川 優(理事) 二八六一

一 名部一
有代 信吾(理事、書) 三七九一
有代 和夫(記、會計) 二二〇一
尾藤 由 三三三〇
森下 正則 三三九一
下広 茂一 三八九五
一 島一
森藤 幸(会長) 二七〇六
森藤 雅毅(理事) 二六八四
奥田 保次 二二三二
須甲 甚一 二六六七
山田 長次(理事) 三六四八
山田 昌枝 三六四八
森 数雄 二五五四
山田 良 二七九一
田中 篤 二七九二
直井 篤美 二六六一
一 白鳥町一
玉井 秀夫 二一三三二
◎平成元年度入会者
一 剣一
池田智恵子 二二八二
武藤美恵子 三二九〇
一 大間見一
松井 薫 三九九一
松井 と志 四〇八五
一 河辺一
白田百合子 二〇四六
一 美並村一
清水 文枝 二四八六

昭和六三年度 事業報告

四月二八日 会計監査
五月一〇日 執行部会

一四日 総会 記念講演 能
について後藤孝一郎先生

七月五日 執行部会 ぎふ中部未来
来博について

一二月 ぎふ中部未来博見学
平成元年一月二五日 執行部会

一泊研修旅行について
二月一日 役員会 一泊研修旅行

その他について
三月一七日・一八日 大阪奈良方
面文化財見学 二七名参加

平成元年度 事業計画

四月三日 執行部会

一八日 役員会

六月三日 総会 記念講演 野田
直治先生

六月 執行部会

七月 町内文化財見学(山田地区)
八月七日 薪能「くるす桜」共賛

一〇月 執行部会・役員会・郷土
歴史勉強会

平成二年一月 執行部会・役員会

三月 文化財見学(一泊) 役員会

「文化財やまと」一五号発行

昭和63年度収支決算書

(単位:円)

収入の部				
項目	予算額	決算額	増減	摘要
1.繰越金	179,027	179,027	0	
2.会費	1,138,000	968,000	△170,000	
会費	288,000	272,000	△16,000	
特別会費	850,000	696,000	△154,000	※(注)
3.補助金	45,000	45,000	0	
4.寄付金	1,000	13,000	12,000	森藤氏3千円前田孝氏1万円
5.諸収入	2,973	3,423	450	県本部3千円 利子423
合計	1,366,000	1,208,450	△157,550	
支出の部				
項目	予算額	決算額	増減	摘要
1.会議費	90,000	75,980	△14,020	
総会費	50,000	36,980	△13,020	
役員会費	40,000	39,000	△1,000	
2.事業費	1,090,000	818,179	△271,821	ぎふ中部未来博
研修費	950,000	770,179	△179,821	123,400
会報発行費	140,000	48,000	△92,000	大阪奈良文化財見学 646,779
3.事務局費	36,000	7,580	△28,420	
消耗品費	5,000	850	△4,150	
通信費	15,000	6,190	△8,810	
旅費	10,000	0	△10,000	
その他	6,000	540	△5,460	
4.負担金	144,000	134,000	△10,000	
5.予備費	6,000	0	△6,000	
合計	1,366,000	1,035,739	△330,261	

平成元年度予算書(案) (単位:円)

収入の部			
項目	予算額	前年度予算額	増減
1.繰越金	172,711	179,027	△6,316
2.会費	1,030,000	1,138,000	△108,000
会費	280,000	288,000	△8,000
特別会費	750,000	850,000	△100,000
3.補助金	50,000	45,000	5,000
4.寄付金	1,000	1,000	0
5.諸収入	3,289	2,973	316
合計	1,257,000	1,366,000	△109,000
支出の部			
項目	予算額	前年度予算額	増減
1.会議費	90,000	90,000	0
総会費	50,000	50,000	0
役員会費	40,000	40,000	0
2.事業費	960,000	1,090,000	△130,000
研修費	860,000	950,000	△90,000
会報発行費	100,000	140,000	△40,000
3.事務局費	36,000	36,000	0
消耗品費	5,000	5,000	0
通信費	15,000	15,000	0
旅費	10,000	10,000	0
その他	6,000	6,000	0
4.負担金	140,000	144,000	△4,000
5.予備費	31,000	6,000	25,000
合計	1,257,000	1,366,000	△109,000

歳入計 1,208,450
歳出計 1,035,739
次年度へ繰越 172,711

※(注) ぎふ中部未来博 3,000 × 34
大阪奈良文化財見学 22,000 × 27

編集後記

○「ときはくれゆく春よりぞ、また短かきはなかるらん。恨みは友の別れより、さらに長きはなかるらん」(藤村「晩春の別離」)いつのまにか晩春から若葉の候となりました。會員の皆様、お変わりございませんか。

○会報第一四号をおとどけいたします。本号は沢山の玉稿をいただいて有難うございました。文化財見学記も多くよせていただきました。当時の感慨をよみがえらせてもらいました。都合で参加できなかった方もお味読下さい。

○今夏は昨年のように能楽「くるす桜」が共賛されます。私達はもちろん、多くの町民に観賞していただくよう協力したいと思っております。○本年は数名の方が本会に入会して下さいました。何といっても数は力です。環境も人心も汚染されてゆく現状です。有形・無形の文化財を後世に伝えてゆく責任は大きいと思います。

人類のゆくえいかにとひたすらに思惟したもう弥勒菩薩は

(畑中・木島記)